

ケアレスミス：一点差の合否

入学試験 1 点差で合否が分かれることの意義について私見を述べます。試験問題の適否や手続きエラーの内容ではありません。ケアレスミスやちょっとした勘違いで失った 1 点で落第する事についてです。わたしは落第させることに賛成です。

ケアレスそのものについて考えます。18 歳にとって入学試験は人生初めて迎えた大事と言ってもよいでしょう。その大事にケアレスミスするようでは、人間（落ち着き・冷静・内省・度胸：死語ではない）が十分ではありません。ケアレスミスしない受験生もいるのです。手術台に登るとき、どちらの外科医を選ぶでしょう？注射液の取り違えはないかと、看護婦の顔を窺うでしょう？大事に際した不注意を看過されては、その後にも不注意しやすい。病院検査室で技師ごとにエラーの頻度を調べると、特定の 1, 2 人にエラーが集中している（昔こういう調査がアメリカで論文になったことさへある）。組織に起こるエラーは実はミスする人を抱えているか否かに大きく左右されていることは、少しサイズのある組織を扱えば実感する事です。

以前にも申しましたように、1 点差で敗戦し 1 cm 差で滑落するのが現実です。ケアレスミスなどと頓狂を言うてはいられません。1 点差で落第しても、捲土重来できる機運を醸成し、それを支持する制度を構築することが我々社会の目指すところで、ケアレスミスの許容を醸成することではないと考えます。大学のケアレスミス？で人生が変わってしまう？のならば、それを許容しないと同時に、自分のケアレスミスの結果を真っ当に受け止めるものです。そして、看護婦として大学事務員として教員として医師としてケアレスミスしない人間になってもらわねば困ります。

（高等教育フォーラム 2001.06.19）